
車輪の唄

逃げ水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

車輪の唄

【著者名】

Z8430D

【作者名】
逃げ水

【あらすじ】
BUNPONCHUKENの車輪の唄を小説にしてみまし。

(前書き)

もしかした気に入らない人もいるかもしれません、
けたら幸です。

今日朝早く、俺は大切な人の大切な用事を手伝つために自分の自転車に乗つてそいつの家に向かつた。

「おはよー。」

そいつは大きな鞄を地面に置き、俺に手を振つてゐる。

「おはよ、恵美。荷物はそんだけか。」

「そうだよ、最低限必要な物しか入れてないから。それより早く行こ、隼人。電車の時間に間に合わなくなるよ。」

そう言つて恵美は俺の自転車の後ろに跨がつた。

今日の大変な用事とは、俺の彼女の恵美が遠くに引越しすため駅まで俺が送迎する事になつた。

ただ俺達の住む町は田舎のため、電車が1時に一本しか出ておらず乗り遅れると次までかなり時間が掛かる。

「よしー飛ばすのはいいけど、安全運転でね。」

「飛ばすのはいいけど、安全運転でね。」

「任しつけ。」

そして俺は自転車をこじりだした。

俺の自転車は年期物だ。とくに車輪にいたつては錆び付いて、キーと悲鳴をあげながら俺達の体運んでいく。

駅までの道程、ペダルをこぐ俺の背中には寄り掛かる恵美の温もりが確かに感じられた。

それも今日で最後。

もう感じじるられる事は無い。

商店街の近くまでこぎ着いた。

此処まで来れば駅は近い。

しかし明け方の為なのか、商店街はとても静かだった。

「やっぱり朝早いから人が誰もいないね~」

「そうだな。」

恵美の言つとおり、人っ子一人いないらしい。

「世界中に一人だけみたいだな。」

俺は小さく言葉を零した。

「えつ、何か言つた?」

「なんでもない。」

自分で言つといて恥ずかしくなつてきて、照れ隠しの為、怒鳴つてしまつた。

「何よ~怒鳴らなくてもいいじゃん。」

そお言つ恵美は、このこのと言いながら人差し指で俺のほっぺを突いてくる。

「やめろよ、危いだろ。」

永遠にこの幸せが続くと思った。
いや、今でも続くじゃないかと思つ。
そんな事はないのに。

「さあ、気合を入れてこぎますか。」

駅に向かうための最大の難関の坂が俺達の前に現れた。
一人乗りですらきついといふのに、今は二人乗りプラス大きな荷物
付きだ。

はつきり言つて、こぎながら登りきるのは不可能だ。
それでもやらなくはならない。

「ほら、頑張れ。もうちょっと、あと少しだよ。」

この声が有る限り俺はペダルを踏み続けることが出来る。
それどころか冗談だつて言える。

「だ、やつぱ無理。ていうかお前重い。」

「こすり」

鈍い音が俺の頭からはせられた。

恵美が本気で俺の頭をグーパンチしてきた。

「あ、危ないだろ！」

「つるさい、女の子に重いとか言う隼人が悪い。」

少しの沈黙、そして一人して笑いだす。

気付けばもうすぐ坂を登りきる所だった。

登りきると一人は同時に言葉を無くした。

迎えてくれた朝焼けがあまりにも綺麗すぎたから。

きつと恵美は笑っているのだろう。

でも振り返ることは出来なかつた。

俺は泣いていたから。

駅に着くと恵美は切符を買いに行く。

俺も入場券を買いに行くため券売機まで行く。

恵美は券売機の一番端の一番高い切符を買つ、俺はその町をよく知らない。

その中でも一番安い入場券をすぐに使うのに大事しまつた。

恵美が改札口を通ろうとしたら、大きな鞄を改札口に引っ掛けで通れないでいる。

そうすると恵美は俺の事を見てきた。

目を合わせないで頷いて頑なに引っ掛かる鞄の紐を俺は外してやつた。

「ありがと。」

笑つて言つてくる。

でも俺は笑い返すことが出来なかつた。

ホームの椅子に座り電車が来るのを待つ。

「隼人、別れる時は笑顔で送つてよ。泣いてる顔なんか見たくないからね。」

「ああ。」

中途半端な返事しか出来ない。

すると列車がやってきた。

「お別れだね。」

「…………。」

俺は返事が出来ない。

響くベルが最後を告げ、恵美だけのドアが開く。何万歩より距離のある一步を踏み出して恵美は言葉をかけてきた。

「約束だよ、必ずいつの日かまた会おうねー。」

「…………。」

俺は応えられず俯いたまま手を振った。

間違いじやないあの時恵美は、恵美は・・・・・

俺は駅に停めていた自転車に乗り一走り始めた。

線路沿いの下り坂を風よりも速く俺は自転車を飛ばしていく。

恵美に追いかけて。

鋸ぎ付いた車輪は悲鳴をあげ、精一杯並ぶけれどもくつと離され

ていく。

泣いていただらあの時、ドアの向こう側で。
顔を見なくつてわかつたよ。

声が震えていたから。

笑顔で別れよつて言つてたくせに。

俺に気付いた恵美は窓ごしに驚いた顔して見てくる。
俺は離れていく恵美に、笑顔で言つてやつた。

「約束だぞ、必ずいつの日かまた会おつ！」

恵美は俺の声が聞こえたのか、涙を流しながら笑顔で何度も頷いて
いる。どんどん遠ざかっていく恵美に見えるように、俺は大き手を
振つた。

列車もすでに見えなくなる。商店街から人の賑やかな声が聞こえて
くる。

「世界中で一人だけみたいだな。」

俺は小さく言葉を零した。

錆び付いた車輪は悲鳴をあげ残された俺を運んでいく。
背中に微かな温もりを無くしたまま。

「恵美、もういいよな。」

俺は頬を流れる涙を止めることがもう出来なかつた。

終
わ
り

(後書き)

感想・評価・アドバイスをよければ下さい。
そうしていただければ、次はきっと気に入つてもうれるものが書け
ると思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8430d/>

車輪の唄

2010年12月12日08時40分発行